

美術、音楽、舞台、私たちのあらゆる表現活動は「不要不急」という言葉に”
囲まれた”この世界においても、その鮮やかさを失うことは決してありませんで
した。

谷正也の色彩に溢れる絵画も、キャンバスという四辺に囲まれることにより、そ
の鮮やかさは一段と際だっているように見えます。

谷はあらゆる制約の中でも、絵を描くことを止めませんでした。日々アトリエに
籠り、自己と世界（溢れる情報）の接点を、キャンバスに触れる絵筆の先端で一つ
ひとつ確かめるように、世界に色彩を与え続けていきました。

そんな谷の絵画は”絵を描く”という真摯な行為が確かにそこにあったことの証明
としての揺るぎないリアリティを湛えています。

本展での谷正也の絵画との出会いが、世界が常に色彩に満ちていることを今一度
思い出す機会になれば幸いです。

2021.7.10 加茂匠